

# 安全保障モデルとしての歴史

— ウェストファリア体制・フィラデルフィア体制・反ユートピア体制

## 一 地球政治をとらえる三個の枠組み

国際政治ではなく地球政治、単一視点からではなく、複合的視点からみることが世紀のわかれめにおける問題の本質により深く迫りうる。と主張するのが小文の目的である。国際政治という概念自体、その根底でウェストファリア的な枠組みに規定されている。国家と国家の関係という意味での国際政治に限定せず、用いられることはあるが、その基底の上に他の枠組みをも付け加えるという調子になりがちである。小文はそのようなウェストファリア的枠組みから少し自由に考えてみよう。そこで地球政治という概念をまず用いよう。さらに枠組みが単一ではなく、複合されたものであることを確認しよう。小文で取り上げる枠組みはウェストファリア、フィラデルフィア、反ユートピアである。これらの概念的な比較検討を行う前に、まずこれら三個の地球政治の潮流をよく表現していると思われ

る代表的な著作を取り上げることしよう。三個の著作とはヘンリー・キッシンジャー『外交』、ブルース・ラセット『民主主義による平和を把握して』、サミュエル・ハンティントン『文明の衝突と世界秩序の再編』である。

キッシンジャーの『外交』は伝統的で現実主義的な外交把握を行う。キッシンジャーの意味する外交とは勢力均衡である。国家の理解する言葉は軍事力であり、その基底には国家利益追求の行動原理がある。近代欧州で発達してきたこのような考えの枠組みはウェストファリアの枠組みである。たとえば、どれかひとつの行動主体が極度に膨張主義的になり、勢力均衡の仕組み自体を破壊しかねないと判断されると他の行動主体は連合してこれを阻止しようとする。それは軍事力を誇示したり、あるいは実際に戦争を挑むことによつてである。戦争は平和を達成する手段であつて、悪いものではないどころか、システムに内包されている正当な政策手段である。しか

猪 口 孝

し、ウェストファリア的枠組みでは勢力均衡を行うことが平和達成の重要な手段であり、その行使が最大の柔軟性をもつてなされなければならぬ。そうである以上、イデオロギー的宗教的必要素が必要以上に勢力均衡の柔軟性を切り崩すようであってはならない。ウェストファリア条約自体、三十年戦争の宗教的対立による過酷な戦いに終止符を打つべく、締結されたと言われる。キッシンジャーは個人的な感情を殺した冷徹な利益計算を当然とする。したがって、みずから重要な役割を果たした米中国交回復はソ連の勢力上昇に抗すべく行ったもので共産主義に強く反対するニクソン大統領の下でこそ電撃的に行われえたとされる。

振り返ってみると、このようなウェストファリア的枠組みは国際法や国際政治の教科書に強く反映されてきた。とりわけ国際公法とよばれる分野はそうであった。キッシンジャーの『外交』は個人的な考えが強く出ていると同時に、標準的なウェストファリアの枠組みが自然な形で表現されている点で小文の議論を展開する時に非常に役立つものである。

ラセットの『民主主義による平和を把握して』は二〇世紀第四・四半世紀にとりわけ顕著になった民主化の流れを強く反映して、自由民主主義の規範的重み、政策的帰結を考えたものである。とりわけ平和に対する政策的帰結を実証的に分析検討し、民主主義国家は民主主義国家に対して戦争は稀にしか行わないという強い議論を提出している。自由民主主義が定着している限り、政府は市民に対して情報は公開され、政策は説明と責任を伴って展開されることが

当然のこととなされる。そうであれば、指導者が安易に戦争を政策手段にしにくい。自由、人権、平等、民主主義という価値が重視されている限り、それらを共有する国家が戦争発動を躊躇することは自然である。このような議論を広範な経験的なデータを使い、平和を被説明変数としてさまざまなモデルを作り、いずれの場合でも民主主義同士不戦の構図が強くなることを実証した。ラセットはさらに、民主主義が平和をもたらすというだけでなく、経済的相互依存が平和をもたらすことと国際組織が平和をもたらすことをも実証し、一七九五年のイマヌエル・カントの『永遠平和のために』の主張する三個の平和達成の政策方法を同時に追求することの重要性を強調している。

振り返ってみると、このような考えはカントによって主張されただけでなく、カントの同時代に米国で基本的には似たような形で実践されていたといえることがわかる。南北戦争までの米国では州が国家であった。州と州の間では紛争が起こったとしてもその解決は法律的なもので、武力行使は稀であった。それというのも、同じ連邦政府のの傘の下にあったということもあるが、それよりも植民地に到着あるいは独立以来の諸価値の共有が重要であったし、市民を基礎に主権を考えていたことも重要であった。これがフィラデルフィアの枠組みである。南北戦争によって米国はウェストファリアの枠組みに一步近づいた様相を呈した。実際、一九世紀後半は後発国であった米国や日本やドイツやイタリアがウェストファリアで言う主権国家により近い形態を整えた時代であった。しかし、二〇世

紀第四・四半世紀には自由民主主義国家の定義にもよるが、広くすると二二〇カ国が自由民主主義国に数えられるようになった。一九七五年には三〇カ国しかなかったのだから、飛躍的な展開といえる。これらがすべてフィラデルフィアの枠組みをとっているわけではないが、主権国家というよりは自由民主主義社会としての共通性を強調し、国境を軽視する思想が強まっていることを否定できない。欧州連合といった地域的に限られてはいるが、一九世紀前半の米国のような様相を呈し、人と物が、自由に移動でき、そして近い将来には通貨さえも共通になる見通しをもつ地域が存在するのである。その中ではいまでもなく、ほぼ不戦の構造が生まれているのである。

サミュエル・ハンティントンの『文明の衝突と世界秩序の再編』はひとつの共通の人類文明で人類が共存するというのではなく、宗教・文化・歴史・地域・人種などによって区別されることを強調し、それが文明の衝突という事態を常に内包して地球政治が展開していることを強調したものである。ここで展開されているのは欧州で生まれた主権国家を軸にした地球政治もなく、米国で生まれた自由民主主義を機軸にした地球政治でもない。むしろその両方によっては軽視されてきた地球政治の潮流が『文明の衝突と世界秩序の再編』では強く表現されている。欧州が圧倒的に地球的な強さを誇った一六世紀から二〇世紀中葉までの表現の仕方は植民地主義であった。植民地主義とは自らの文明的な優越性を基礎にし、その優越した部分がそうでない部分を文明化する使命を帯びて、前者が後者を征服し、帰順させるようにするものであった。しかも従属的・隷属的な

色彩を多分にもっていた。ところが米国が世界の指導者として君臨しはじめるや否や、植民地主義は公式的には少なくともほとんど全廢の方向へと進展した。国際連合創設とともにごく少数の植民地は国連信託統治区域となった。しかもほとんどの植民地は独立していった。国連加盟国はすべて主権国家であり、一八九の加盟国のうち少なくとも七〇—一二〇カ国は自由民主主義国家であるとされる。しかし、主権国家というよりは失敗国家、自由民主主義国家というよりはその付録国家といってもよい国家が少なくない。ボスニア・ヘルツェゴビナ、ソマリア、イラク、カンボジアなどの国家などがその中にいれられるのだろうか。いずれにしても、ハンティントンの焦点は植民地主義の対象であった国家・地域にある。しかもハンティントンの議論の焦点は強烈で排他的な文明が欧米の文明と衝突し、収拾が敏速にはなされにくいだろうという点にある。そのような文明の代表的なのが中国とイスラム教である。米中戦争必至論やイスラム教原理主義即テロリスト論等がその実例である。いずれにしても、植民地主義に遡るこの枠組みは二〇世紀後半に大きな変身を遂げた。米国が世界的な指導者になるにつれ、米国が流布する諸価値が伝播する。それとともに、植民地主義の言葉だけでなく中身が大きく変わる。植民地主義の領域性はほとんど喪失される。同時に地球的にかんりの程度にまで共有される諸価値は米国とか欧州に限らず、全世界に適用される頻度が高まった。そのなかから、人道主義的援助や人道主義的介入といった形で世界強国や国際連合などの国際組織による援助や介入が正当化されるようになった。これは

とりわけブトロス・ブトロス・ガリ国際連合事務総長時代の一九九〇年代前半に強く表現された。経済制裁は軍事介入のひとつ手前で違反国に対してよくとられるようになってきた。ハンティントンの枠組みはグローバル化が深化するにつれ、地球統治という形で世界的指導国や国際組織の責務が増大するかにみえる時に、むしろ反ユートピアという枠組みのなかでしかとえられないものがあることを強調し、世界的指導国や国際組織が一定の距離を取ることをむしろ教示しているとも受け取られる。文明化の使命とか白人の責務というような概念ではなく、むしろ欧米の文明は特殊であり、普遍的ではないことを強調することによって、文明化の責務というような強迫的な概念に悩まされることはないことを主張しているのである。

いずれにしろ、ハンティントンは冷戦後このような異文明を再登場させたのである。ハンティントンの議論に対して賛成か反対かとはともかく、ウェストファリアでもフィラデルフィアでもうまくとりいれることのできない大きな部分をここでは便宜的に反ユートピアの枠組みに入れることにしよう。

## 二 三個の枠組みの概念的比較

行動主体、システムの前提、行動の態様、システムの特徴、そして地球経済との関連を比較してみよう。<sup>(2)</sup>

行動主体はウェストファリアは正常国家、フィラデルフィアは自由民主主義、反ユートピアは失敗国家、システムの前提はウェスト

ファリアは国家主権、フィラデルフィアは人民主権、反ユートピアは主権喪失である。行動の態様はウェストファリアは勢力均衡と覇権参入、フィラデルフィアは束縛と隠遁、反ユートピアは空洞化と崩壊である。システムの特徴はウェストファリアは主権国家の競争、フィラデルフィアは自由民主主義連合の拡大、反ユートピアは失敗国家群、地球経済との関連はウェストファリアは国民経済、フィラデルフィアは地球市場、反ユートピアは世界システムである。

正常国家は競争と協調を繰り返すが、国内では秩序、対外は無秩序という明快な区別をする。主権や領域の侵害に対してとりわけ敏感に反応する。内政干渉に対して強く反発する。自由民主主義は堅固な人民主権と普遍的な規範と価値の広範な共有によって特徴つけられる。自由民主主義の結合が経済的相互依存・統合の重要性を保障し、地球的な安全保障措置の強固なネットワークの創出に役立つような共有規範・価値を土台にすることを強調する。失敗国家は主権の空洞化と経済的周辺化を基礎として、植民地化であれ、人道主義的救済であれ、軍事的侵略であれ、外部からの介入を招来しやすい。

正常国家の行動の態様は勢力均衡と覇権参入である。いずれもシステムの保全にとって危険にならないように、軍事力の変化に対してイデオロギー的宗教的な偏りを最小にしなが、行動主体が離合集散する。自由民主主義の行動の態様は束縛と隠遁である。束縛とは一定の規範や価値を軸に多数の行動主体を束縛する、連合する、そして一体化することである。隠遁とはシステムの存亡にかかわり

そんな時に、そのような危険から逃避することを意味する。失敗国家の行動の様子は空洞化と崩壊である。失敗国家は自律的な行動主体ではなく、対内的には無秩序、対外的には介入である。しかも対外的な介入によって失敗国家自体がそれほど強く影響を受けない。

システムの特徴をみると、ウェストファリアは主権国家からなる国際関係であり、一九世紀から二〇世紀の地球政治を圧倒したモデルである。フィラデルフィアは自由民主主義の結合であり、一九世紀前半の米國、二〇世紀後半の欧州がそのようなモデルに近似して考えられるものである。反ユートピアは一九世紀から二〇世紀そして二一世紀を通して存続しているものであるが、ウェストファリアやフィラデルフィアの影になるモデルである。ウェストファリアは二〇世紀末までに次第に勢力を部分的に喪失しつつあるといわれながらも、未だ強大な影響力を保持している。二〇世紀中葉国際連合創設時ニューヨークの本部ビルは五十カ國の加盟國を想定してのものであったが、一九六〇年代末までに百カ國、一九九〇年代末までに二百カ國近くの加盟國を記録するに到った。加盟の条件は緩く、主権國家とは言いにくい國家も少なくない。フィラデルフィアは二〇世紀第四・四半世紀の初めには三十カ國しか自由民主主義ではなかったとされるが、一九九五年までには七十百二十カ國が自由民主主義であるとされる。定義が緩くなったことがこのような急速の拡大のひとつの大きな要因ではある。フィラデルフィアはグローバリゼーションとそして米國の圧倒的な影響力のおかげで、次第に存在を大きくしている。反ユートピアは主権國家の普遍的な存在と自

由民主主義の急速な地球的伝播によって影が薄れているようにもみることができ、実はそれらの下半身ともいえるものである。構造的にそう宿命づけられているところがあり、短期的には変わりにくい。主権國家のモデルからみても失敗國家、自由民主主義のモデルからみても失敗國家である場合が少なくない。地球経済との関連でみると、ウェストファリアは国民経済モデル、フィラデルフィアは地球市場モデル、反ユートピアは世界システムモデルを成す。グローバルゼーションの深化は国民経済モデルを次第に時代錯誤的にしていると同時に、地球市場モデルと世界システム・モデルの区別を明白にしていた。そのなかで、三個の枠組みは行動主体の考えを規定していく。

三個の枠組みは経済発展段階や地理的な位置によって一義的に固定されているものではない。たしかに経済と地理は大きな規定要因ではあるが、ひとつの枠組みだけで行動する主体は稀である。米國をとってみても、まず主権國家である。しかも世界的指導國である。同時に自由民主主義であって、規範や価値の共有によって広範な國家と広範な個人に大きなアピールする能力を持つ。このため、地球的統治や地球的標準が人口にかいしゃするわけである。さらに反ユートピアの枠組みは世界的指導國である米國にとって常に身近な難題になる。みずからの責務とすべきか、距離を取るべきかである。前者をとれば、地球的な野心や普遍的価値の主張とは調和するが、費用が高い。後者を取れば、普遍的価値の主張からみると奇異なことになるが、費用は安くなりうる。いうまでもなく、距離をとるだ

けでなく、対決していけば逆に費用は高騰する。米国が対外的に要求することをとつても、対日要求のなかで市場自由化は自由民主主義的な枠組みでわかるが、正常国家になれという要求は主権国家のそれにより調和する。米国の対中要求のなかで人権擁護は自由民主主義的枠組みに調和するが、最惠国待遇の停止・延長は主権国家の枠組みにより調和する。国際連合をみてこの点は良くわかる。国際連合自体はウェストファリアの枠組みに調和する。加盟国の承認がないと何も動かない。しかし、多くの問題について安全保障理事会の常任理事国は圧倒的な影響力を行使する。戦後処理の仕組みとしての国際連合である限り、勝利国連合である限り、このことは不可避なのかもしれない。また、非政府組織つまり市民社会の選好をより強く選択的に表現する組織の強い影響下に置かれることが稀ではない。非政府組織の影響力は加盟国を説得し、国際連合の全体としての意思をも規定することも稀ではない。たとえば一九九七年の対人地雷全廃条約の調印は非政府組織の圧倒的な活動によって可能になったといつても差し支えない。一九九〇年代前半に一七ある国際連合機関のうち、三個の機関がその予算、人員、そして活動を大きく拡大することに成功した。それは国連難民高等弁務官事務所、世界食糧計画、そして国際児童基金である。その成功の秘訣は錦の御旗の創出と国際メディアの活用である。難民、基金、児童はいずれも錦の御旗になりやすいが、一定の工夫なしにはならない。対人地雷全廃条約でも軍縮や安全保障の問題とは完全に切り離して、人道的な観点からの説得宣伝工作が見事に成功した例である。国際メ

ディアの活用なしに地球市民の支持は得にくい。国際通信網なしには非政府組織の成功は不可能である。たしかに国際連合はウェストファリア的ではあるが、フィラデルフィアの視点をなしに成功は覚束ない。さらに国際連合は大多数の反ユートピア的な枠組みでとらえやすい問題をゆめゆめおろそかにできない。実際国際連合の多くのリソースは第三世界とよばれる地域に配分されている。地球経済の核心は世界銀行、国際通貨基金、国際決済銀行などが監視しているが、地球経済の落ちこぼれ部分にたいする監視と部分的な救済は国際連合によってなされているといつても過言ではないだろう。地球安全保障の核心は北大西洋条約機構と日米安全保障条約によって支えられているといつてもよいだろうが、地球安全保障における落ちこぼれの監視と部分的救済はやはり国際連合によってなされることとが少なくない。このような意味で国際連合は三個の枠組みを同時に具現している組織といえる。そして世紀の変わり目においてほとんどの国家は三個の枠組みを混合している。

### 三 ウェストファリアの幻想の経済的基盤

ウェストファリアはその成立当時にもその後においても必ずしも他の枠組みを排斥する圧倒的な枠組みではなかったのに、なぜかほかの枠組みを影の部分に置いてしまう力をもった。一七世紀当時、主権国家だけでなく、ハンザ同盟、都市国家も隆盛していた。中世的な封建領主を軸とする制度も根強く存在した。帝国という巨大な制度も強固に存在していた。中世は普遍的な宗教世界と局所的な政

治秩序があったとされる。しかし、それも欧州世界に限ったことであつた。欧州中世・近代初期の外側には技術水準からみても高度な文明を誇っていた帝国が存在していた。しかし、欧州では主権国家が競争し、欧州自体が大躍進を遂げる。ここに主権国家モデルが一九世紀から二〇世紀にわたって強烈な魅力をもって伝播したのである。欧州が一層隆盛に向かうなかで欧州の外側は反ユートピア的な枠組みでよりよく理解できるようになったかのように見えた。さらにフィラデルフィア的な枠組みで地域的な展開を始めたシステムも一九世紀中葉までに主権国家的な枠組みへの吸収がみられた。米國も日本も欧州のウェストファリア的枠組みに大きく転換していくのである。米國はフィラデルフィア、日本は小中華世界とでもいえる枠組みを展開していたが、突如としてどちらも崩壊していく。米國では南北戦争、日本では明治維新がそのきっかけとなつたのである。そして二〇世紀一杯ウェストファリアの全盛が続いていった。

しかし、二〇世紀の変わり目が近づくにつれて、技術進歩は経済の地球化を可能にし、米國の世界的指導力は普遍的な規範と価値を伝播するのに役立ち、いつのまにかフィラデルフィアの枠組みが一定の影響力をもつに至つた。経済の地球化と普遍的な規範・価値の普及は地域的な区分けから判断することを難しくしていった。

ウェストファリアの幻想はそれぞれの地球経済との関連からもよく理解できる。ウェストファリア的な枠組みでは国民経済とそれをつなぐ国際経済が主要な概念であつた。それが経済の地球一体化のなかで、次第に勢力を減退していく。グローバリゼーションはフィ

ラデルフィアに調和する。(いうまでもなく、フィラデルフィアの発祥地米國がフィラデルフィアであつた南北戦争までの時期に米國経済があつたのは世界経済の半周辺経済として中核経済であつた欧州経済とはなにかば距離をとつたスタンスであつた。)フィラデルフィアは地球経済と調和する。地球政治の三個の潮流に対応する地球経済の三個の潮流を指摘するならば、国民経済的モデルとしての後発的経済発展モデルのアレクザンダー・ガーシエンクロン、地球市場モデルとしてのロバート・ライシユ、世界システムモデルとしてのイマヌエル・ウォラステイーンをあげることが出来るようか。

ガーシエンクロンはドイツやロシアの経済発展の歴史をみるなかで後発性が時に経済発展にとって有利な条件になることを主張した。国家主導の工業化を推進しようとする時にドイツではライン流域の鉄鋼業とプロイセンの農業の連合が国家主導の工業化を容易にした。ラインの鉄鋼業は後発的なために国家の庇護を要求したし、プロイセンの農業は競争力が強かつたために工業での保護主義には強い関心を示さなかつた。このことはプロイセン国家による強力な国家主導的工業化を容易にした。ガーシエンクロンは後発性の有利性について主張したのである。ロシアについてはほぼ同様なことがいえるだろう。ソ連邦時代のスターリン的工業化もガーシエンクロンによれば同様の説明があたえられるだろう。中央計画経済は結局国家主導の工業化ではなかつたか。このような国民経済の工業化、経済発展については正統の経済史では最も普通のことであつた。英国についても、米國についても、日本についても、国民経済と国際環境を

明確にわけて経済史的記述説明を行うことに何らの疑問を挟む人はいなかったのである。後発的工業化を行った経済史についてはそのことが一層明確になされていた。

ロバート・ライシュの『諸国民の仕事』が明らかにするように、地球市場の視野が前面に出ている。地球市場が地球経済の基礎であつて、それと調和した国民経済が経済発展で躍進を遂げることになる。調和したとは、市場自由化を促進し、政府規制を解除する構造改革努力が一定の成果を挙げていることを前提としている。ガーシエンクロンの考えでは国家主導政策の巧拙が問題になっていたのに、ライシュの考えではむしろ国家主導の後退と市場主導の経済運営の採否が問題になっている。地球市場の原動力は国民経済単位ではなく、地球経済そのものであり、それはどこにいようと電子通信技術で瞬時に経済取引を行う無数のスペキュレーターの集まりなのである。ここで重要なのはそのような通信技術の出現であり、その経済取引が地球規模でなされることである。経済取引の判断基準は情報公開性と株主主権性を基礎にしたかなり短期的な利潤可能性である。ライシュの考えは国民経済の発展とは即地球市場を自らの魅力で招待できる能力ということになる。このような考えによれば、国民経済の発展の考えから生まれたさまざまな経済制度を根本的に破壊することが肝心な最初の仕事になる。ショック・セラピーがジェフリー・サックスの処方箋で前面に出るわけである。それはペルーに対して、ロシアに対して、そしてインドに対しても何らかわることがないのである。

イマヌエル・ウォラステイーンは国民経済が色濃いなかでも世界市場が力学を作り、その力学に乗ることのできる国民経済は強い勢力となり、そうでない経済はそうでなくなると主張した。ウォラステイーンはむしろそのような力学によって影となっていく地球経済の陰の部分の理解を深くすることの重要性を強調したのである。ウォラステイーンの説明は国民経済が世界市場をどのように有利に活用できるか、それを富国強兵のために利用できるかというものである。したがって、ガーシエンクロンの考えと大きく変わるものではない。政治でいえばウェストファリアの考えに近い。フィラデルフィアの考えではないのである。むしろ反ユートピア的な考えである。周辺化された国民経済、あるいは国民経済も形成できない周辺的外縁に対する関心がウォラステイーンの中核にある。欧州経済、さらには大西洋経済、そして最近では米欧日経済が次第に全体として中核経済となり、ほかの経済を周辺化していくことがウォラステイーンの関心なのである。

地球経済の発展のなかでなぜガーシエンクロンの考えが最も近くなるまで圧倒的な強さを誇ったのであろうか。地球政治でいえばウェストファリア的な考えが最も近まで圧倒的な強さを誇ったのに匹敵する。結局のところ技術水準が政治でも経済でもその運営単位の規模を強く規定する。近代のほとんどの期間において技術水準は国民国家の規模を、人口一千万〜五千万人のものにしてきた。統治の密度からみてそれが限界であった。帝国の形態をとる国家は統治の密度が低いために、より大きな版図をもつことが普通であっ

た。近代においても国民国家と帝国と都市国家というように規模において大きく異なるものが共存していたのは統治の密度の違いのためである。いうまでもなく、国民国家の形成が北半球を中心に促進されていったのは一九世紀後半であるが、二〇世紀第一・四半世紀までに帝国はほぼ消滅した。しかし、国民国家の誕生は二〇世紀を通じて波状となって継続された。第一次世界大戦の後、中央欧州とラテンアメリカで進展した。第二次世界大戦の後、アジアとアフリカで進展した。とりわけ後者において一九四五年当時三十カ国前後の国際連合加盟国が一九六〇年代末には一〇〇カ国、一九九〇年代末には二〇〇カ国近くになるのである。それが国民国家かどうかは別として、少なくとも国際連合の考える主権国家として存在しているのである。経済活動でも同様で、一九世紀から二〇世紀中葉まで人口一千万〜五千万人が適正規模とされたのである。人口は少なすぎても市場が発達しないし、大きすぎても市場として効率が悪くなるといふ嫌いがあった。英国、ドイツ、フランス、日本、米国、ロシアといった経済がそのカテゴリーに入る。米国やロシアは帝國的な規模であったが、技術進歩は次第に規模を大きくしていったし、国内人口の規模をそれほど気にしない構造をも用意していった。

#### 四 結論

ウェストファリア、フィラデルフィア、反ユートピアの枠組みは二〇世紀から二一世紀の変わり目に重要な枠組みとして並立している。安全保障を考える時に、ウェストファリアだけで考えることが

視野をひどく狭めることが小文でかなり明らかになったと思う。フィラデルフィアは一〇〇年の低迷の後、欧州連合の展開と米国の文化的覇権によって大きく復権している。反ユートピアはウェストファリアの名目的な膨張によって主権国家のかくれみのの下で、そしてフィラデルフィアの普遍的価値へのコミットメントの普及によって人道主義的介入と地球統治という口実が広く受容されることによって、無視できない枠組みとなっている。これら三個の枠組みは地理的な位置や経済的な発展段階で規定されているわけではない。地球政治と地球経済が現実になっている以上、三個の枠組みはどの行動主体にとっても意味をもつ枠組みである。地球政治と地球的安全保障を考える時には少なくともこれら三個の枠組みを同程度に視野にいれることがこの大きな変換期における現象の深い理解に必要である。

- (一) Henry Kissinger, *Diplomacy*, New York: Simon and Schuster, 1993; Bruce Russett, *Grasping the Democratic Peace*, Princeton: Princeton University Press, 1993; Samuel Huntington, *The Clash of Civilizations and the Remaking of World Order*, New York: Simon and Schuster, 1993. この議論は私を中心になして組織した「米国の民主主義推進」会議における次の論文で最初に展開された。Takashi Inoguchi, "One Region, Three Frameworks: United States Promotion of Democracy in Pacific Asia," paper prepared for presentation at the conference on United States promotion of democracy, Washington, D.C., January 12-13, 1998; Takashi Inoguchi, G. John Ikenberry and Mi-

chael Cox, eds., *American Democracy Promotion : Its Impulses, Strategies and Impacts*, forthcoming. 理論的考察は次記の如く展開されてくる。Takashi Inoguchi, "Peering into the Future by Looking Back : Westphalia, Philadelphia, and Anti-Utopia," prepared for presentation at the Annual Meeting of the International Studies Association, Minneapolis, 18-22 March 1998 ; It will appear together with a few other papers in the *International Studies Quarterly* and also be published in Davis Bobrow, ed., *Approaching the Millennium : Fusion, Fission and Dominance in International Relations*, Cambridge, Mass. : Blackwell.

(5) 地政学上の理論的考察は以下の考察を基礎として行われる。その中で「Westphalia and All That," in Judith Goldstein and Robert Keohane, eds., *Ideas and Foreign Policy*. Ithaca : Cornell University Press, 1993, pp. 235-264, Henryk Spruyt, *The Sovereign State and Its Competitors*. Princeton : Princeton University Press, 1994 ; Thomas Biersteker and Cynthia Weber, eds., *State Sovereignty as Social Construct*, Cambridge : Cambridge University Press, 1996 ; Paul Schroeder, "Historical Reality vs. Neorealist Theory," *International Security*, Vol.19, pp. 101-148 See also the Forum of the *American Political Science Review*, to which Randall Schweller, Stephen Walz, Kenneth Waltz and others have contributed thoughtful pieces on the realist paradigm ; トーマス・ヘンリクス・スプリット著、Daniel Deudney, "Binding Sovereigns : Authorities, Structures, and Geopolitics in Philadelphia Systems," in Thomas Biersteker and Cynthia Weber, eds., *State Sovereignty as Social Construct*, 1996, pp. 190-239 ; Daniel Deudney,

"The Philadelphia System : Sovereignty, Arms Control, and Balance of Power in the American States-Union, ca. 1787-1861," *International Organization*, Vol. 49, No. 2(Spring 1995), pp. 191-228 See also Andrew Moravcsik, "Taking Preferences Seriously : A Liberal Theory of International Politics," *International Organization*, Vol. 51, No. 4(Autumn, 1997), pp. 513-53 ; イノグチタクシ著、理論的考察の如く、'インフリアン'、'ラングミン'、'エムト'の如く、理論的考察は以下の枠組みの発展に役立つ。トーマス・ヘンリクス・スプリット著、

(6) 地政学的な基礎としての理論的考察は以下の枠組みの発展に役立つ。その如くである。ヘンリクス・スプリット著、Alexander Gerschenkron, *Economic Backwardness in Historical Perspective*, Cambridge, Mass. : Harvard University Press, 1962 ; トーマス・ヘンリクス・スプリット著、Robert Reich, *The Work of Nations*, New York: Vintage Books, 1992. イノグチタクシ著、Immanuel Wallerstein, *The Modern World System*, New York : Academic Press, 1974-

(5) イノグチ たかし 東京大学

relations, tends to be informal and seems to be predicated on the game of stag hunting. A prohibition regime which prohibits production, possession and use of a certain weapon is inclusive, non-discriminatory and thus very similar to environmental or human right regimes.

Security regimes do not have military capabilities by themselves except for alliances and collective security but usually do play indispensable preventive roles.

## “Global Security System as History: Westphalian, Philadelphian and Anti-Utopian”

INOGUCHI Takashi

In this article the author argues that into the new millennium three competing frameworks govern the global security framework; Westphalian, Philadelphian and Anti-Utopian. The Westphalian framework was the dominant framework for the last two centuries especially this century. It is characterized by state sovereignty as its basic premise, order within and anarchy without as a systemic feature, and balancing and bandwagoning as its behavioral modalities. The Philadelphian framework existed in the United States between its colonial period and the Civil War. It has been resuscitated globally in the last quarter of this century in quite a resilient fashion, incorporating much of the Westphalian framework into it. It is characterized by popular sovereignty as its basic premise, liberal democracy as its systemic feature, and binding and hiding as its behavioral modalities. The Anti-Utopian framework existed until the mid-20th century as the colonialist framework. It has been revived as it has remolded itself as a global, humanitarian mission undertaken by major powers international organizations non-governmental organizations, by stripping itself of its erstwhile territorial aggrandizement component. It is characterized as loss of sovereignty as its basic premise, failed or failing states as a systemic feature, and hollowing out and collapsing as its behavioral modalities. These three frameworks compete vigorously in all actors of global politics

and the manifestation of varying weights in the coming evolution of global politics needs to be carefully analyzed in order to see the shape of global politics in the next millennium.

## Anarchy as an Equilibrium: A Theoretical Analysis

ISHIDA Atsushi

Realists regard the anarchic structure of international relations as exogenous constraints on the foreign policy decisions of sovereign states. They do not explain but assume anarchy. They explain, instead, that the absence of centralized authority, which enforces international agreements, hinders the efficient solution of political conflicts among states, as in a Prisoner's Dilemma game. But why is this anarchy as an inefficient institution sustained by rational actors? Why don't the rational states attempt to establish international institutions that would facilitate the centralized making and enforcement of international agreements?

They do not do so because the centralized *making* of agreements would fail to serve their common interest for the following four reasons even if the centralized *enforcement* would serve their common interest. First, the decentralized control of information by sovereign states can be a bargaining advantage. Second, even if states comply with agreements without centralized enforcement, as in the case of policy coordination, they often have divergent preferences over which policy to choose as a common policy. Third, it is extremely difficult to establish a centralized authority which clearly defines property rights beyond national borders even if the clear definition of property rights could improve the efficiency of decentralized bargaining over the regulation of economic activities with international externalities, as Ronald Coase argues. It is because the international definition of property rights is expected to generate serious distributional consequences. Fourth, developed and developing countries have divergent interests in agreements that would have redistributive effects among them.